



- 一 左大臣の邸。源氏の妻は左大臣の娘である妻の上。
- 二 貴い所(宮中)から退出すること。
- 三 伊勢物語一段「春日野の若紫の摺衣しのぶの乱れかぎり知られず」による。人目を忍ぶ恋の乱れかと。
- 四 あつてはならない不都合なおふるまひも時々まじっていたことだ。
- 五 陰曆五月ごろの長雨。梅雨。
- 六 「物忌」は種々の凶兆・変事・触穢にあつたり、又、陰陽道でいう天一神(なかがみ)・太白神(ひとよめぐりのかみ)の方角の禁忌の時、身をきよめて家に籠っていること。ここは宮中の物忌であるから、官人が殿上に籠ることになる。
- 〔二〕 雨夜の品定め開始―源氏と頭中將
- 七 源氏の君は妻である妻の上を訪れずにいっそう宮中に長く伺候したままであつた。妻の家の世話をしているのが当時の習慣。
- 八 御妻束。妻の家で婿の世話をしている。
- 九 左大臣の御子息の若君たち。
- 〔三〕 源氏の宮中における宿直所は淑景舎(しげいしや)即ち桐壺。
- 二 左大臣の子息頭中將。母が先帝の皇女なので「宮腹」といわれる。

ひようし給ひて、大殿にはたえくまかで給ふ。しのぶの乱やと疑ひ聞ゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたるうちつけのすぎずきしさなどは、好ましからぬ御本性にて、稀にはあながちに引き違へ、心づくしなことを御心に思し止むる癖なんあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。

長雨晴れ間なき頃、うちの御物忌さし続きて、いと長居侍ひ給ふを、おほ殿にはおぼつかなく恨めしく思したれど、よろづの御よそひ、なにくれとめづらしきさまに調じ出で給ひつゝ、御むすこの君たち、ただこの御宿直所に宮仕へを勤め給ふ。宮腹の中將は、中に親しく馴れ

- 一 右大臣の四女を、頭中將は妻としている。
- 二 サ変動詞「ものうくす」の連用形に接続助詞「て」の添ったもの。

- 三 「聞え」は源氏に対する中將の謙讓、「給ひ」は中將に対する作者の尊敬。
- 四 「まつはる」は四段、下二段ともに活用するが、ここは下二段活用。
- 五 かしこまつた態度も保てなくて。
- 六 「むつる」は下二段活用。
- 七 「つれづれ」は何のする事もなく、単調で心の晴らしようがない状態をいう。
- 八 清涼殿の殿上の間。
- 九 「をさをさ」は普通否定を伴なうが、ここでは「人ずくなに」が否定に近い意味を持っているので代用されている。

聞え給ひて、遊びたはぶれをも、人よりは心やすく、馴しくふるまひたり。右のおとどろのいたはりかしづき給ふすみかは、この君もいと物憂くして、好きがましきあだ人なり。

里にても、我がかたのしつらひまばゆくして、君の出入し給ふに、うちつれ聞え給ひつゝ、夜昼学問をも遊びをも諸共にして、をさく立ち後れず、いづくにてもまつはれ聞え給ふ程に、自らかしこまりもえおかず、心のうちに思ふことも隠しあへずなんむつれ聞え給ひける。

つれづれと降り暮して、しめやかなるよひの雨に、殿上にもをさをさ人ずくなに、御宿直所も例よりはのどやか